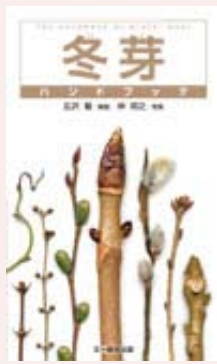


【緑地を楽しむ本】

『冬芽ハンドブック』

広沢毅 / 解説 林将之 / 写真

文一総合出版 2010年11月



林の中は、明るくなりました。木々は潔く葉を落とし、梢を天高く伸ばしています。夏の間は射し込んでこなかった陽の光も、今では地面を暖かく照らしています。

花も葉もついていない木はどれも同じようで、知っているはずの木でも「あれ、この木は何だったかしら？」とわからなくなってしまいます。でも、今年は『冬芽ハンドブック』があるから、きっと大丈夫。

冬芽とは、冬の寒さを耐え忍び春になると伸び出して花や葉になる芽です。葉を落として裸になったと思った木にも、もう春に向けた準備は着々とできているのです。『冬芽ハンドブック』を見ると、冬芽や葉痕（葉っぱがついていた跡）の、何と個性的でユーモラスなこと！冬芽の検索表がついていますから、これだけで何の木かあ

てられそうです。木の達人になった感じですね。

冬芽は寒い冬を乗り切る「命のカプセル」なのだと思書に書いてあります。確かに、寒さをしのぐために産毛の衣をまとった冬芽（モクレンなど）、何重にもうろこのような葉で覆われた冬芽（コナラなど）、ねばねばの液をつけた冬芽（トチノキなど）と、それぞれ工夫を凝らしています。中には裸芽といって何にも覆われていない寒そうな芽もあります（アジサイなど）。でもこれは中に不凍液をため込んでいるそうです。巧妙な仕組みにびっくり！

よく見かける落葉樹（200種）の冬芽や葉痕の写真と解説、木のミニ情報など、読むだけでも著者の木への愛情が伝わってきて冬だというのに心がぽかぽか温まりました。

いよいよ冬本番。今年の冬は楽しみいっぱいです。
(小川)